16　野口英世初恋の人 山内ヨネの医術開業後期試験合格期日をめぐる新知見について

殿﨑　正明，山本　　鼎
日本医科大学医史学研究会

山内ヨネ（以下ヨネ）の生涯は余り語られて来ていないので野口英世（以下野口）と関連させて以下にその概略を記す.

奥村鶴吉編『野口英世』（岩波書店，昭和8年）によると，野口はフランス語を習っていた天主教会堂でヨネと出会い，ヨネと連れ立っていた渡部鼎の妹夏子から会津女学校に通い，山内家の再興を目指している15歳であるというその素性を聞き出して難解な手紙を幾度も書くも，ヨネの母千代により会津女学校長から天主教会堂の藤生金六牧師に伝えられ叱責訓戒を受ける.

野口は明治29年9月に医術開業前期試験受験の為上京する際に，ヨネも医学を志すことを夏子から聞かされ，「負けるものか」と闘争心を燃やす．野口出郷後ヨネは父の友人を頼って済生学舎に入学する．ヨネは講義の合間に野口が黒板に英文か独文かで書き綴っている姿を見る．その後野口も一心に講義を聴いているヨネを発見し，頭蓋骨の標本を贈ったり，医学書の難解な部分についての質問を受ける様になる．明治32年5月，横浜海港検疫官補から当時ペストが流行していた清国牛荘へ赴任する前に，本郷湯島4丁目にヨネの寓居を訪れ，暫しの別れを惜しみ新橋駅までの散歩を誘うも「雨天で，試験前でもあるので」と断られると野口は「それでは貴女の写真を一枚記念として頂きたい」と申し出ると「こちらで撮ったものは一枚もない」と断られる.「それでは写真館に行って貴女とご一緒に撮ろうではありませんか」と言うも夜も遅く明け方まで対座したまま帰って行った．牛荘からも度々手紙を送り，また指輪を二つ作って夫々の名前を刻ってヨネの名の入ったものを贈ったりする．明治33年6月帰京後ヨネ宅を訪れた際に「山内さんはご不在ですよ」と居留守を使われ，憤然と去る．明治35年頃問い合わせたヨネの従兄菊地良馨からの返信でヨネは医師免状を得て開業し，医師森川俊雄と結婚して幸福な家庭を築いている事を知り，彼女の良人には負けない決意を抱く.

小桧山六郎，『野口英世　医聖を育んだ人々』では，医師の資格を取ったヨネは若松に帰り，旧宅に「三省堂」の看板を掲げ医院を開業した．当時，若松で開業していた女医はヨネが最初の人ともいわれ，ヨネは母の勧めにより福良村（現郡山市湖南町）出身で11歳年上の医師森川の後妻となり鎮雄，歌子，大助，隆吉の四児を産む．さらに財団法人野口英世記念会編纂『野口英世伝』（岩波書店，昭和38年，p. 241–242）では大正4年の野口帰国の際に再びヨネに会い，夫と死別していること，息子の一人をアメリカに連れて行って教育してくれるよう頼むが野口は不可能であると断ったとされている．しかし『野口英世　医聖を育んだ人々』では，ヨネは請われる通り講演会に行き閉会後の記念写真の撮影に加わり，その後野口の宿泊場所であった東山温泉の新瀧旅館を訪問する．その時，野口はヨネの子どもの留学の心配をしたがヨネは野口の厚意をあっさりと断ったとされている．野口はニューヨークを訪れる会津の人達に会うとヨネの近況を訊ねていたという．ヨネは医院を1人で切り盛りして昭和20年12月11日，64歳で亡くなった.

従来，ヨネの医師免許取得年は，『日本杏林要覧』（日本杏林社　明治42年12月）によると明治38年に医師免許登録とあり，『日本医籍録』（医事時論社，大正14年8月）では明治38年に試験及第，済生学舎修業，順天堂医院に実地研究，明治38年に大町二ノ町30にて小児科三省堂医院開業とある．この度明治33年10月18日の医術開業後期試験及第者（『東京医事新誌』1177号1929–30，明治33年10月27日）の中にヨネの名を見出すことが出来た．ヨネは明治14年1月1日生まれであることから19歳で合格していたことになり，ヨネが若き日の野口の好意を悉く撥ねつけた理由の一つに医術開業後期試験をまさに控えていた時期と重なることが判明し，その合格年の訂正とともに如何に優秀な女性であったか改めて再評価が求められる.